

## 創刊号によせて

甚野 尚志

ヨーロッパの中世とルネサンスの文化は、日本人にとり、直接につながる過去の文化ではありません。しかし我々は、自分たちの祖先の文化であるかのように大きな関心をもち、これまで長い間、多くの研究を行ってきました。なぜ日本人は、ヨーロッパの中世とルネサンスの文化を身近なものと感じ、またそれに魅惑されてきたのか。私は、二つの大きな理由があると思います。

一つには、我々がそこに、日本の文化とうわべは違うように見えても、何か芯の部分で共感しあえるものを見出すからではないでしょうか。たとえば、ヨーロッパ中世の騎士道は、これまでしばしば日本の武士道と比較され、騎士の主君への忠誠心や高邁な倫理体系のなかに、日本の武士の世界と共通するものがあると指摘されてきました。また中世の封建制社会に関しても、朝河貫一が行った比較封建制の研究にみられるように、西欧と日本の封建制社会の間には、比較可能な多くの類似点があるといわれています。あるいは、ヨーロッパ中世のロマネスク芸術の素朴な力強さに、日本の仏教芸術に通じる美が感じられることは、美術史家が指摘してきたことです。さらに例を挙げれば、日本の安土・桃山時代の絢爛なる芸術文化は、しばしばヨーロッパのルネサンスに対比され、そこに同種の文化の刷新を看取る研究者もいます。

また我々の関心の背後にある、もう一つの理由としては、日本人の生活がますます欧米化していることがあります。我々日本人は、政治、経済、社会のすべての側面で、西洋文明を摂取して近代化を成し遂げましたが、その結果、西洋文明が根ざす中世やルネサンスの文化を、いやおうなしに自分たちの文化の根源の一つとして受容しました。したがって、ヨーロッパの過去の文化を学ぶことは、日本人が模倣し同化してきた文明の根幹を知ること、いわば、第二の故郷の文化を知ることになったのです。ですから我々にとって、ヨーロッパの中世やルネサンスの文化を探究することは、自身の生きる世界の根源を見つめ直すこと、といえるのではないのでしょうか。

このたび私たちは、早稲田大学のプロジェクト研究所の一つとして、「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所 (Institute for European Medieval and Renaissance Studies)」を立ち上げました。この研究所を創設するにあたっての動機も、いま述べたような、日本人がヨーロッパ中世とルネサンスの文化に関心をもつ理由と深くかかわっています。

その一つには、現在、ヨーロッパの文化に深い関心をもたない学生が増えているという、憂慮すべき状況があります。このような現状に対して危機感を抱く大学の教員は数多くいます。ただ私たちは、ヨーロッパの中世とルネサンスの文化の研究も、知の現代的状況に即して再考すれば、これまで以上に日本の過去の文化と比較可能なものとして、豊かな発見に満ちた分野になると考

えています。そして、ヨーロッパと日本との新たな比較の視点が得られれば、それは、ヨーロッパ研究だけでなく日本研究の活性化にもつながり、ひいては人文科学全体の発展にも貢献できるのではないのでしょうか。

もう一つには、現在、インターネットなどを通じて進行している世界の一体化において、欧米の文化がその中心的な規範となっているという事実があります。日本のみならず世界全体が、多かれ少なかれ、欧米の文化が形成した規範に従って動く現実を直視する必要があります。世界全体の新しい共生のあり方を考えるためにも、欧米の文化の根源にあるヨーロッパの中世やルネサンスの文化を問い直すことは、今後ますます重要な問題となるでしょう。

「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所」では、このような問題意識に立って、今後さまざまな共同研究を遂行していくつもりですが、何よりも我々の共同研究は、それが学際的なプロジェクトであることに斬新さがあります。歴史学、美術史学、哲学、文学、西洋古典学、宗教学などの多様な分野の研究者が、領域横断的に、既成の学問の枠に囚われずに、ヨーロッパの中世とルネサンスの文化を解明していくことが目標です。

またこの研究所のメンバーには、早稲田大学の教員に限らず、他大学の研究者にも加わっていただきました。このように学外の専門家にも開かれた組織にすることで、この研究所が早稲田大学の学内組織を超えて、日本におけるヨーロッパ中世・ルネサンス研究の拠点の一つになることも目指しています。

最後に、「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所」の紀要として創刊した、この雑誌『エクフラシスーヨーロッパ文化研究一』のタイトルの意味を説明しておきましょう。まず「エクフラシス(ἔκφρασις)」というギリシア語ですが、この言葉は「生彩ある表現」を意味します。古典古代の文芸作品では、登場する絵画や彫刻を、言葉により細部にいたるまで表現するのが通例ですが、「エクフラシス」は、その表現技法を指します。たとえば、ホメロスの『イリアス』第18歌における「アキレウスの盾」についての詳細な叙述は、「エクフラシス」の典型的な例とされます。つまり、描写の対象となるモノを生彩あふれる言葉で叙述し、そこに芸術的な生命を宿らせる技法が「エクフラシス」なのです。

この雑誌に掲載される論文が、鋭い分析と生彩ある表現で、それぞれの考察対象を読み解くものであってほしい、と願いつつ命名しました。また副題の「ヨーロッパ文化研究」は、この雑誌が「ヨーロッパ中世・ルネサンス」のみを対象とするだけでなく、古代や近代も含めて、ヨーロッパ文化の根幹にかかわる問題を視野に入れたものにしたい、という意思の表明です。

いずれにしても『エクフラシスーヨーロッパ文化研究一』が、我が国のヨーロッパ文化研究に対し、「生彩ある表現」を与える雑誌として継続できれば、それは私たちにとって望外の幸せです。